

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.232

2012年9月

名古屋大学オープンキャンパス2012を開催

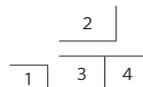


目次

●ニュース	
名古屋大学オープンキャンパス2012を開催	3
高大連携教育プログラム（短期集中型）を実施	4
濱口総長がタイを訪問	5
名古屋大学若手育成プログラム教員成果発表会を開催	5
産業技術総合研究所との技術交流会を開催	6
第23回日本数学コンクール及び第16回日本ジュニア数学コンクールを開催	6
名古屋大学・日本IBM 共同セミナー「IT と創る賢い地球の未来」を開催	7
若手女性研究者サイエンスフォーラム・女子中高生理系進学推進セミナーを開催	7
経費節減アイデア表彰式を開催	8
福祉・共済事務担当者説明会を実施	8
●知の未来へ	
極微量成分をはかる	9
松宮 弘明（エコトピア科学研究所准教授）	
●知の先端	
これからの自動車制御技術～キーワードは「協調」	10
鈴木 達也（大学院工学研究科教授）	
●キャンパスクローズアップ	
ES総合館	12
●学生の元気	
第61回東海地区国立大学体育大会 一男子優勝、女子4位一	14
●部局ニュース	
ソウル大学病院と協定を締結	15
テクノフロンティアセミナー2012を開催	16
テクノサイエンスセミナー、化学・生物実験講習会を同時開催	16
「3大学工学系人材交流プログラム」第3回シンポジウムを開催	17
第24回「形式ベキ級数及び代数的組合せ論」国際会議を開催	17
平成24年度学術ポータル担当者研修を実施	18
ICCAE 2012年度第1回オープンセミナーを開催	18
第25回タンDEM加速器及びその周辺技術の研究會を開催	19
第81回防災アカデミーを開催	19
高大連携高校生防災教育推進事業「高校生防災セミナー」を開催	20
防災講演会あいちを開催	20
「育もう！子どもたちの元気な笑顔を！」を開催	21
グローバルCOE 第5回国内シンポジウムを開催	21
ミクロの探検隊を開催	22
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成24年7月16日～8月15日	23
●イベントカレンダー	25
●ちょっと名大史	
第13代総長 濱口道成 <small>はまぐちみちなり</small> 一 名大をひきいた人びと ^⑱ 一	28

名古屋大学オープンキャンパス2012を開催





- 1 模擬講義の様子
- 2 豊田講堂ホワイエの様子
- 3 全体企画「学生生活あれこれ」の受講風景
- 4 学部紹介の様子

名古屋大学オープンキャンパス2012が、8月8日(水)から10日(金)の3日間にわたり開催されました。これは、高等学校2年生を中心とした大学進学希望者を対象に、教育・研究における特色の紹介や施設見学等を通じて「名古屋大学で何が学べるか」を紹介し、今後の適切な進路選択をする上での意識を高めてもらうことを目的として、毎年行っているものです。連日の猛暑の中、多くの高校生が参加しました。

学部企画では、学部長をはじめ、教職員・在学生が一体となり、内容に趣向を凝らした学部説明、模擬講義、施設見学等が行われ、参加者は、教員や在学生と直接懇談して、自分の進路等

について詳しく説明を聞き、熱心に質問したりメモを取ったりしていました。

また全体企画では、教職員による「大学の紹介」、「学生生活あれこれ」、「女性研究者から見た名古屋大学」等の説明が行われたほか、生協学生委員による附属図書館、博物館、野依記念物質科学研究館、赤崎記念研究館、ノーベル賞展示室等の公開施設の見学ツアーが実施され、さらには「名大生との対話コーナー」、「教科書・参考書の展示コーナー」等も設けられました。いずれの企画にも多くの参加者が訪れ、会場は活気にあふれていました。

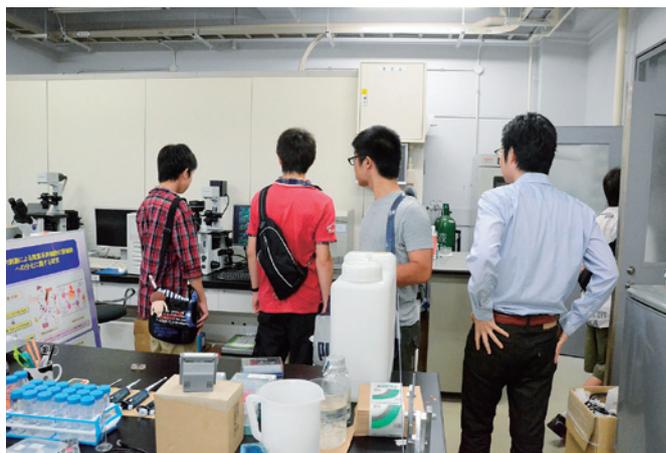
今年度のオープンキャンパス参加者は、3日間を通じて8,264名でした。

また、事前申込みができなかった1,320名を含め、総勢で9,584名の方々がキャンパスを訪れました。

オープンキャンパス参加者数

8月8日(水)	教育学部	568名
	経済学部	766名
8月9日(木)	工学部	1,845名
	法学部	735名
	医学部(医)	566名
	農学部	713名
8月10日(金)	文学部	701名
	情報文化学部	233名
	理学部	1,355名
医学部(保)		782名
合計		8,264名

*医学部保健学科のオープンキャンパスは大幸キャンパスで実施しています。



高大連携教育プログラム（短期集中型）を実施

「高大連携教育プログラム（短期集中型）－中津川プロジェクト」が、8月7日(火)から9日(木)までの間、中津川研修センターにおいて実施されました。

同プログラムは、教育学部附属学校協議会の企画によるもので、4年目となる今回も、大学院教育発達科学研究科中等教育研究センターと共催し、杉山理事をはじめとする本学教員、植田中等教育研究センター長、大谷附属学校長、附属学校教員及び附属学校同窓生を含む本学の学生の参加のもと、教育学部附属高等学校1、2年生の39名を対象に行われました。

プログラムは、「よむ・かく・みる・ふれる・ときはなつ」という学習テーマで構成され、7名の本学教員によりロールプレイやグループワークなどの実技を取り入れた講義や実習が行われました。

足立 守博物館特任教授が担当した「みる」、「ふれる」、「ときはなつ」では、岐阜県南東部の多治見から中津川にかけての断層を観察し、鉱物（岩石）の多様性を学ぶとともに、鉱物博物館での体験や、五感のすべてを使って付近の自然を観察して取り組んだ「俳句作り」を通じて、自分の感性を磨き、自然への理解を深めました。

杉山理事が担当した「よむ」、「かく」、「みる」では、映画「Love Letter」（岩井俊二監督作品）を題材として、制作者の「何か伝えたいもの」を読み解きました。

小松 尚環境学研究科准教授が担当した「みる」、「かく」、「ときはなつ」では、テンセグリティの製作に挑戦しました。テンセグリティとは、張力（tension）と統合（integrate）を組み合わせた造語です。建築に必要な要素である「用・強・美」のうち強と美を具えたテンセグリティを製作することでこの構造形式を体感しました。

安井浩樹医学系研究科寄附講座准教授、青松棟吉同寄附講座助教、阿部恵子同寄附講座助教が担当した「みる」、「ふれる」では、医師の診察場面を想定したシナリオを基に診



屏風山断層について説明する足立特任教授

察のプロセスを実際に経験し、医師は診察中に何を考えているのかということ学びました。今回は、脳血管障害（脳梗塞）を発症して受診した患者、あるいは患者の家族に対して、医療面接・身体診察でどのように情報収集するかを考え、神経学的所見評価のための身体診察法について実践しました。

和田 肇法学研究科教授が担当した「よむ」、「かく」、「ときはなつ」では、労働問題や名古屋大学ハラスメント防止宣言を題材にした事例問題にそれぞれグループで取り組み、意見や考えを発表して討論を行い、法律の世界について理解を深めました。

また、2日目には生徒による自主企画が行われ、課題文に登場する人物を題材に「価値観」の自己点検を行い、個々人の価値観の違いについてグループで討論し発表しました。

3日間の企画を通じて、普段聞くことがない大学教員や大学生の話聞き、教科を越えた学問に触れることができ、参加者にとって学問への意識を深める機会となりました。



杉山理事による授業風景



青松寄附講座助教、阿部寄附講座助教による対座式視野検査の実演の様子

濱口総長がタイを訪問

濱口総長が、7月18日(水)から22日(日)までの5日間、タイ王国を訪問しました。この訪問は、本学の学術交流協定締結校であるチュラロンコン大学、カセサート大学、チュラポーン大学院大学・チュラポーン研究所等を訪問するとともに、全学同窓会タイ支部と交流することを主たる目的としたものです。また本学は、昨年バンコク周辺を中



全学同窓会タイ支部が催した懇談会における記念撮影

心に発生した水害により被災した協定校に、教職員からの水害義援金を送っており、今回はその後のお見舞いを兼ねての訪問となりました。

19日(木)、総長一行は、まずカラヤー・ティンサバットチュラロンコン大学副学長らを訪問しました。総長はお見舞いの言葉を述べた後、来年、同大学及びカセサート大学で開催するAC21の新規プロジェクト「AC21国際スクーリング」について意見交換を行ったほか、タイ語を学ぶ学生の受け入れや研修機会の提供等を依頼しました。この日は、チュラロンコン大学の卒業式でもあり、午後からは、総長をはじめ出張者全員が卒業式に招かれました。

同日夕刻には、全学同窓会タイ支部による懇談会が催されました。俵 幸嗣在タイ王国日本大使館一等書記官及びバンコク在住の日本人本学卒業生で構成されるバンコク名大会のメンバー4名も出席し、同窓生の思い出が詰まったスライドが上映されるなど、和やかな雰囲気でした。

翌20日(金)には、カセサート大学、チュラポーン大学院大学・チュラポーン研究所の他、マヒドン大学を訪問し、今後の交流について意見交換するとともに、AC21国際スクーリングについて説明し、協力を依頼しました。

名古屋大学若手育成プログラム教員成果発表会を開催

名古屋大学若手育成プログラム YLC (Young Leaders Cultivation) 教員成果発表会が、7月24日(火)、シンポジオンホールにおいて開催されました。

同プログラムは、本学において教育研究を将来にかけて継続的に発展させるためには、若手教員、特に助教クラスの質的、量的な確保が重要であることをふまえ、大学全体



成果発表会の様子

として継続的かつ計画的に若手教員を採用、養成するために実施している戦略的なプログラムです。YLC教員は、3年にわたって研究と教育の研鑽を積み、終了時には国際的経験も兼ね備えた研究者・教員として自立できることを目指します。また、相互に切磋琢磨し交流する場として、濱口総長や近藤高等研究院長等も出席するセミナーを定期的に開いています。本学独自の若手育成プログラムとして、学内外から注目されています。

成果発表会には、本学の教職員や大学院生など約80名が参加し、平成22年度に採用された若手研究者8名が、文系、生命系、理工系の3分野で、日頃の研究成果及び今後の抱負を報告しました。それぞれの報告後には、活発な質疑応答が行われ、3年間の育成期間を経て、YLC教員の研究レベルが国際的に見て独立した研究者として十分高いレベルに達していることが確認できました。最後に、総長から「これからも研究を精進し、みなさんの中から、坂田先生、平田先生、水田先生のような、本学が誇りうる研究者が輩出されてほしいものです」と激励の言葉がありました。

なお、これとは別に実施する審査において、期待どおりの研究成果を上げたと評価されれば、YLC教員の任期の延長が認められます。

産業技術総合研究所との技術交流会を開催

独立行政法人産業技術総合研究所（産総研）との技術交流会が、7月27日（金）、産業技術総合研究所中部センター連携会議場において開催されました。

この技術交流会は、平成19年に連携・協力協定が締結されてから今回で通算10回目の開催になり、参加者は、本学と産総研の関係者を合わせて44名にのびりました。



あいさつする松尾副総長

開催にあたり、鳥山素弘産業技術総合研究所中部センター所長、松尾副総長から開会のあいさつがあり、続いて今年度の技術シーズを育てるための共同調査研究（FS研究）の提案テーマの発表が行われました。

発表は、本学と産総研の研究者がペアを組んで、複合材料に関する3件のテーマについて行われました。FS研究も、開始より6年目を迎え、内容がより充実した発表会となりました。

懇親会では、松尾副総長による乾杯の後、発表会だけでは時間が足りなかった参加者の間で意見交換が活発に行われ、盛況の内に閉会しました。

得意分野の技術・研究を互いに補完しながら、両機関間の共同研究等における連携が強くなることが期待される技術交流会となりました。

第23回日本数学コンクール及び第16回日本ジュニア数学コンクールを開催

第23回日本数学コンクール及び第16回日本ジュニア数学コンクールが、8月11日（土）、名古屋・大阪・三重・和歌山の4会場において開催されました。

同コンクールは、中・高校生を対象に、科学と技術の基盤を担う夢とロマンを秘めた若者の才能を発掘し、今後も育成していくことを目的に開催しています。平成2年から

「日本数学コンクール」を、同9年から「日本ジュニア数学コンクール」を行っており、平成22年度からは、大学企画として開催しています。

今年度の課題は、両コンクール共通問題として「平均当てゲーム」、「五輪の絡み」の2題、日本数学コンクール問題として「カーナビでドライブ」、「ビット列通信」の2題、日本ジュニア数学コンクール問題として「完全ラテン方陣」、「最大の三角形」の2題が出題され、小・中・高校生186名が、楽しみながら難しい数学の問題に取り組みました。

審査員により論理性や着眼点などが審査され、11月3日（土）に表彰式が行われる予定です。



「五輪の絡み」等の問題に取り組む参加者

名古屋大学・日本 IBM 共同セミナー「IT と創る賢い地球の未来」を開催

名古屋大学・日本 IBM 共同セミナー「IT と創る賢い地球の未来」が、7月19日(木)、IB 電子情報館大講義室において開催されました。当日は106名の参加がありました。

最初に、渡辺理事によるあいさつがあった後、高橋倫二日本 IBM 執行役員西日本支社長が「IT と創る賢い地球の未来」と題し、IT を駆使して社会が抱える問題を解決す



講演する高橋日本 IBM 執行役員

る IBM の Smarter Planet 計画について紹介しました。

次に、福本俊一日本 IBM 執行役員豊田事業部長が「グローバル人材とは」と題し、グローバル展開するための IBM での組織改革と、グローバル人材に求められる9つの competency (チャレンジ精神、パートナーシップ、グローバルな協業、システム思考に基づく行動、相互の信頼、専門性の発揮、不断の変革、効果的なコミュニケーション、仲間の成功への援助) の話をし、その後、大西情報科学研究科長が「名古屋大学のグローバル人材育成の取り組み」と題し、グローバル COE プログラム、グローバル30プログラム、全学英語教育など本学における取り組みを紹介しました。

引き続き行われたラウンドテーブルでは、参加者が3部屋に分かれ、IBM の理事・役員を囲んで、今後の世界と情報産業の行方、企業における博士課程後期課程修了者の扱い、企業が学生に期待するものなどについて意見交換があり、特に、学生から積極的な質問がありました。

終了後には、有志による懇親会も行われ、有意義なセミナーとなりました。

若手女性研究者サイエンスフォーラム・女子中高生理系進学推進セミナーを開催

若手女性研究者サイエンスフォーラム・女子中高生理系進学推進セミナーが、8月8日(水)から10日(金)の3日間、豊田講堂ギャラリー及び第1会議室において開催されました。同企画は、若手女性研究者の研究発表・交流を目的とし、同時に、理系分野に興味のある中・高校生が、理系分野で活躍中の女性研究者の話を直接聴くことで刺激

得られる機会となっています。

9日(木)は、若手女性研究者37名によるポスターセッション、10日(金)には、山西陽子工学研究科准教授、藤江双葉多元数理科学研究科准教授及び佐藤仁美環境学研究科助教の3名による基調講演が行われました。また、ポスター発表者についてフォーラム開催期間中に投票が行われ、最終日の授賞式で、河内美樹高等研究院若手育成プログラム (YLC) 特任助教、大学院理学研究科博士課程前期課程1年の御田村侑香里さん、浅野美帆工学研究科助教の3名に藤井理事から総長賞が授与されました。

今年度の開催は、オープンキャンパスの開催と重なったこともあり、愛知、岐阜、三重の東海3県の女子中・高校生とその保護者、本学の研究者等に加えて、多くの男子学生も来場しました。会場は例年以上に熱気に包まれ、自然科学分野についての意識を深めるよい機会となりました。



ポスターセッションの様子

経費節減アイデア表彰式を開催

経費節減アイデア表彰式が、7月24日(火)、総長応接室において挙行されました。

本学では、これまで様々な経費節減に取り組んできましたが、より一層の節減効果をあげるため、職員から経費節減アイデアを募集しました。この表彰は、応募された多数のアイデアの中から、経費節減効果が期待できる優秀な提案をした職員を讃えることにより、経費節減に対する意



表彰式の様子

識の向上を図ることを目的としたものです。

表彰式には、被表彰者14名全員が出席し、初めに、濱口総長から被表彰者一人ひとりに賞状と副賞の記念品が手渡されました。続いて、総長から祝辞と「これからも引き続き経費節減に意欲を持って取り組んでいただきたい」との被表彰者への期待の言葉がありました。



記念撮影

福祉・共済事務担当者説明会を実施

福祉・共済事務担当者説明会が、7月26日(木)、豊田講堂第1会議室において実施されました。同説明会は、主に福祉、共済業務に関する留意点等を中心とした事務担当者向けの説明会で、今回初めて実施されたものです。

初めに、大矢総務部職員課長が「福祉・共済関係事務は個人への影響が大きいので、日頃誤りやすい点を今回確認

して書類の誤記を防ぐことにより、業務を円滑に進め、手続きを速やかに進められるようにしてほしい」とあいさつしました。続いて各担当者が、共済組合のカード化、被扶養者の認定・取消、雇用保険・社会保険・年金関係手続き、育児休業、介護休業、兼業、職員証、教職員(共済組合員)向けローン等の手続きについて説明をしました。



あいさつする大矢課長



説明会の様子

極微量成分をはかる

エコトピア科学研究所准教授
松宮 弘明

「極微量成分の分析」というと重箱の隅をつつくように思われる節もあるようですが、その存在量の少なさは裏腹に極微量成分が大きな意味を持つ場面は思いのほかあります。例えば、金属鉄の純度を高めていくと99.999%程度を境に性質が大きく変わり、なかなか酸に溶けず(写真1)さび難く、また割れ難くてしなやかになります。不純物がわずかにppm (part per million、100万分

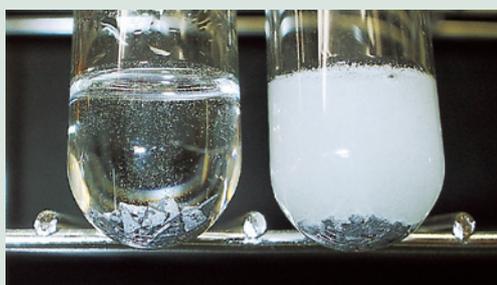


写真1 高純度鉄（左）と通常の純鉄（右）。それぞれ試験管に取り塩酸を加えると、高純度鉄は極めて穏やかにしか溶解しないが、通常の純鉄は激しく発泡して溶ける。



写真2 イオン液体。左側の試験管では希薄な色素が、矢印で示したイオン液体に高度に抽出濃縮されている。

の1)程度入っているかどうかという世界です。環境分野でも、ppmやppb (part per billion、10億分の1)レベルの汚染物質が生態系や我々の健康に重大な長期的影響を及ぼすことがあります。しかし、そのような極微量成分について試料を直接分析しても、装置が出す数値が必ずしも正しいとは限りません。大過剰に共存する主要成分が機器分析を妨害したり、感度が不十分なことがよくあるからです。そこで、機器分析に先立って妨害物質を取り除き、極微量成分を濃縮することが、信頼性の高い分析値を得るには重要な鍵となります。

私達は界面活性剤を利用する分離法について検討を重ねてきました。界面活性剤は水中で分子集合体を形成し、水に溶け難い疎水性化合物を内部に取り込みます。しかし、取り込まれるのは疎水性化合物だけではなく、鉄を塩化物イオンやチオシアン酸イオンと反応させて陰イオン錯体に変換すると、含酸素系非イオン界面活性剤に捕集できます。界面活性剤自身は水に溶けていますが、ポリスチレン樹脂の表面に吸着させたり、また、塩の添加や加温によって水中から分離できます。このようにして高純度鉄の主成分元素である鉄を取り除くことにより、様々な不純物元素についてppbレベルでも分析できました。他にも、極微量成分を疎水性錯体などの別な化学形態に変換したり、またイオン性界面活性剤や、同じ有機塩でも常温で溶融しているイオン液体(写真2)を使って、鉄試料や環境試料の極微量成分を分離濃縮することも種々検討しています。また、界面活性剤やイオン液体は反応場としても興味深く、シリカゲル表面で陽イオン界面活性剤の分子集合体を形成させ、そこに有機リン系農薬を捕集して分解することや、イオン液体に類似した安価な有機溶融塩の中でセルロース系バイオマスを化学製品の原料に変換することを検討しています。

これからの自動車制御技術～キーワードは「協調」

鈴木 達也 大学院工学研究科教授

昨今の自動車に求められる機能・要求は多岐にわたっています。走行性能や乗り心地は言うまでもなく、安全性・低燃費や低排気ガス等も重要な評価指標となってきています。これに対し、素材、電池、モータやエンジンといった各要素技術の進歩が、望まれる要求に応えるべく、車を進化させる原動力となることは言うまでもありません。しかしながら、計測技術や計算機技術、さらには通信技術等の進歩により、これらの要素技術に加えて、よりシステム的な視点から自動車制御のあり方を見直す時期に来ていることは間違いありません。私どもでは、これからの自動車制御のあり方を考える上でのキーワードは「協調」だと思っています。いろいろな意味の協調がありますが、特に重要なのは「ドライバと車の協調」と「車同士の協調」だと考えています。以下、それらについて私どもの研究例をご紹介します。

「ドライバと車の協調」を考える上で重要となるキーテクノロジーは、ドライバの運転行動モデリングです。良い運転行動モデルが得られれば、精度の高い運転行動予測が可能となり、結果として、違和感の少ない運転支援技術につながれます。また、自動運転を目指す際にも運転行動モデルは重要な役割を果たします。運転行動は一般に、周辺環境の認知情報を入力、ハンドルやアクセル・ブレーキペダルの操作情報を出力とする入出力関係で表現できると考えられますが、その際、入出力関係にどのような数理構造を持ち込むかでモデルとしての特徴が決まります。私どものグループでは、人間が行う「判断」は離散論理的な事象駆動型の機能として、また「操作」は連続的な時間発展型の機能として数理モデル化で

きるとの着想から、連続系と離散系が混在したハイブリッドな動的システムモデルに基づいた運転行動のモデル化に取り組んでいます。結果として、ドライバの判断特性と操作特性の両者を同時に理解することができるようなモデルが構築されます。図1に高速道路上での前方車追従タスクのデータ分布と解析結果を示します。図1の横軸は前方車との車間距離、縦軸は相対速度を表し、データの色分けはハイブリッドシステムのシステム同定手法を用いて得られた入出力特性のモード分割結果を示します。この結果より、ドライバは4つの運転制御モード（Mode A～D：それぞれ異なる連続ダイナミクスを持つ）を巧みに切り替えながら追従運転行動を実現していることがわかり、各制御モード間の遷移条件（ドライバの判断条件に相当：一例を点線で示します）や各モードでの操作制御則を推定することができます。典型的な制御モード間の遷移が図中に矢印で示して

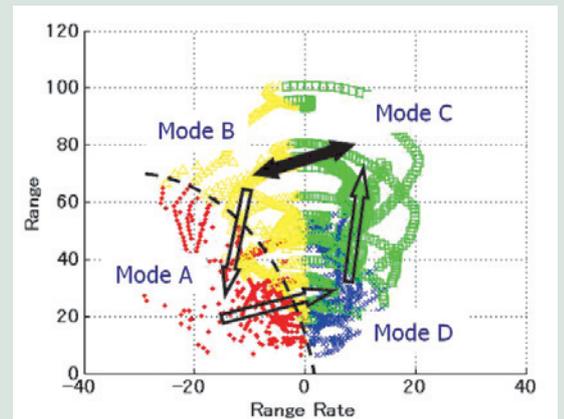


図1 前方車追従行動のモード分割例



図2 協調駐車デモ実験の様子

ありますが、通常は Mode B、C 間を行き来しているのに対し、前方車が減速し、危険な領域である Mode A に入ったと判断すると、それを回避する制御則に切り替え、その後 Mode D を経て Mode C に復帰しているのがわかります。ハイブリッドシステムモデルを運転行動モデリングに導入する最大の利点は、このようなドライバが行っている運転制御のモード分割およびモード間の遷移条件（判断特性）を、観測データに内在する動的な特徴のみから抽出可能な点にあり、より高次の運転支援につながれると期待しています。

一方、車同士の協調に関しては、高速道路上での隊列走行などが注目を集めていますが、私どもでは協調駐車システムの開発に取り組んでいます。図2に5月31日に豊田講堂テラス前で行われ

たデモ実験の様子を示します。この実験では、3台のうち1台を人間が操作、他の2台が自動運転を行うという設定のもと、排他制御を組み込んだコンセンサス制御（合意形成）のアルゴリズムを実装し、協調駐車を実現しました。複数台の自動運転車両による協調駐車の実験は世界的にもユニークな実験であり、各種報道機関で取り上げられました。

今後は、今まで以上にドライバとの親和性が高く、かつ他車との協調性の高い自動車の実現に取り組んでいきたいと考えています。

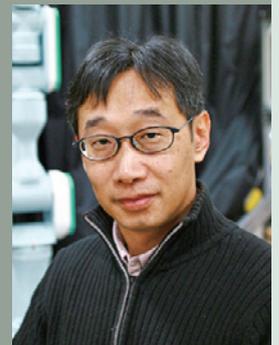
1964年生まれ。1991年名古屋大学大学院工学研究科博士課程後期課程修了（工学博士）。2006年名古屋大学大学院工学研究科機械理工学専攻教授。1999年から1年間カリフォルニア大学バークレー校機械工学科客員研究員。

モットー：人事を尽くして天命をまつ

ひとこと：運転が好きではないので、自分自身のためにも早く自動運転を実現したいと思っています。

趣味：ゴルフ、テニス、野球観戦

すずき たつや



38. ES総合館



ES総合館は、ノーベル物理学賞受賞者である益川博士・小林博士の素粒子宇宙起源の研究施設と、工学研究科、ノーベル賞展示室、講義室、講堂、図書室などをもつ複合的な研究施設です。

敷地は地域に面した交流ゾーンと教育研究交流ゾーンに位置し、低層部は階段状のレクチャーコートにより人を引き込み、回遊性のある交流空間を構築しています。また東西をつなぐエントランスホール周辺に公開性の高いゾーンを配置し、機能（展示室、講義室、講堂、図書室、カフェ、ラウンジ等）を立体的に接続することにより、学会等の催しに対応するとともに、地域に開かれた大学としての空間を構成しています。

高層部研究フロアは、中庭を取り囲む形式で研究ゾーンを配置し、廊下は幅を広くし、全面ホワイトボードの壁とすることで、共用部である廊下でも研究議論がなされる工夫をしています。

環境対策としては、全館においてLED照明を設置するという国立大学で初となる取り組みを実施しています。LED照明の特徴としては、長寿命、低消費電力、低発熱性、耐衝撃性に優れている、機器に水銀（有害物）を含んでいないことなどがあり、環境に対する配慮をしています。

その他に高断熱仕様として、断熱材や複層ガラスを使用し、空調の消費電力を抑えるよう配慮することで年間の省エネ・Co2削減の効果が見込まれる計画としています。また、居室のドアに自然換気システムサッシを設置し、欄間部分を開放可能とすることで、自然風を取り込むナイトパーズ効果が期待できる工夫や、一部床材に間伐材を利用した工夫もなされています。

外装においては、斜めフィンや庇を設置することで、夏季は日差しを遮り、冬季は日差しを取り入れるなど自然の温度調節が可能としつつ、居室



■建築概要

建物名称：ES総合館
 主要用途：大学・研究施設
 建築面積：3,542.67 m²
 延床面積：15,298.67 m²
 階数：地上7階
 構造：SRC造



からの視界確保にも配慮した計画としています。また、3階テラスを屋上緑化することで、屋根の断熱性能の向上、日差しの照り返し防止等に対応するとともに、同じくテラスの一角にドライミストを設置することで、南面における夏季外気の冷却効果が見込める計画としています。

屋上は将来対応として、太陽光発電システムの設置も可能とした想定をしています。

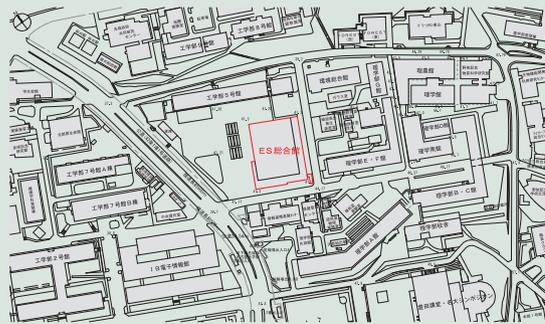
建物周りには、クールチューブ（地中埋設管）を設置し、地中熱を利用して外気を予冷・予熱させてから空調設備に取り込むことで、熱交換の負荷を減らし、省エネ等の効果を見込める計画としています。

外構舗装（広場・舗装）においては、透水性ブロックを使用することにより、水資源の有効利用、雨水の流出制御、汚濁負荷の軽減を図ることが可能となる等、この建物はエコビルとして省エ

ネ・Co2削減等環境に配慮した様々な取り組みが施され、建築環境総合性能評価システムについて、CASBEE（名古屋）Sクラスの基準を満たす施設として評価されています。

※一般社団法人照明学会主催 照明学会普及部門において「平成23年照明普及賞・優秀施設賞」受賞

※環境省主催 省エネ・照明デザインアワード2011総合施設・公共施設部門において「優秀事例賞」受賞



1	2	6	7
3	4	5	8

- 1 西側ファサード 南西より
- 2 エントランスホール
- 3 展示室
- 4 講堂
- 5 図書室
- 6 廊下
- 7 西側ファサード 南西より（LED照明）
- 8 院生室 床間伐材
- 9 南側ファサード 西日遮断

第61回東海地区国立大学体育大会
— 男子優勝、女子4位 —

第61回東海地区国立大学体育大会（東国体）が、主に6、7月の土・日曜日に開催されました。東海地区8国立大学が数競技の開催を分担し、今年度は男子20種目、女子19種目が東海地区の各所で実施されました（一部雨天等により中止の種目あり）。

出場した選手達は東海地区の国立大学ナンバーワンの座をかけて全力でプレーし、梅雨空を吹き飛ばすような熱戦で大会は大いに盛り上がりました。

7月29日(日)をもって全競技を終了し、男子は6年ぶりに本学が、女子は昨年に引き続き静岡大学が優勝しました。

なお、本学の女子は4位という結果に終わりました。来年度は本学が東海地区の強豪校として男女そろって優勝できるように、選手の一層の精進と活躍が期待されます。

第61回東海地区国立大学体育大会総合得点表

■男子

競技種目	大学名	三重大		名古屋大		岐阜大		名工大		豊技大		静岡大		浜医大		愛教大		備考
		順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
1	陸上競技	5	4.0	4	5.0	3	6.0	6	3.0	7	2.0	2	8.0	8	1.0	1	10.0	
2	水泳	3	6.0	2	8.0	1	10.0	7	2.0	8	1.0	4	5.0	6	3.0	5	4.0	
3	硬式野球																	雨天中止
4	準硬式野球																	オープン競技
5	硬式テニス	3	6.0	1	10.0	5	2.5	2	8.0	5	2.5	5	2.5	4	5.0	5	2.5	5位以下は順位なし
6	ソフトテニス	3	5.0			2	6.0	4	4.0	7	1.0	5	3.0	6	2.0	1	8.0	
7	バスケットボール	2	5.0			3	4.0	6	1.0	4	3.0	1	6.0			5	2.0	
8	バレーボール	6	2.0	2	6.0	1	8.0	7	1.0	4	4.0	3	5.0	5	3.0			
9	卓球	5	3.0	1	8.0	4	4.0	7	1.0	6	2.0	2	6.0			3	5.0	
10	バドミントン	1	10.0	3	6.0	2	8.0	5	4.0	7	2.0	4	5.0	8	1.0	6	3.0	
11	サッカー	7	1.0	1	8.0	2	6.0	3	5.0			5	3.0	6	2.0	4	4.0	
12	ハンドボール	6	2.0	3	5.0	1	8.0	4	4.0			5	3.0			2	6.0	
13	柔道	5	2.0	1	8.0	2	6.0	4	4.0	5	2.0	5	2.0			3	5.0	5位以下は順位なし
14	剣道	5	2.0	2	6.0	1	8.0	5	2.0	5	2.0	3	5.0			4	4.0	5位以下は順位なし
15	空手道	5	4.0	4	5.0	6	3.0	7	2.0	8	1.0	1	10.0	2	8.0	3	6.0	
16	弓道			3	5.0	5	3.0	2	6.0	7	1.0	6	2.0	1	8.0	4	4.0	
17	体操																	オープン競技
18	馬術	3	2.5	1	6.0	3	2.5	2	5.0			3	2.5			3	2.5	3位以下は順位なし
19	アーチェリー	4	1.5	1	5.0	3	3.0					4	1.5			2	4.0	
20	少林寺拳法	5	1.0	2	4.0	3	3.0					4	2.0			1	5.0	
合計得点			57.0		95.0		91.0		52.0		23.5		71.5		33.0		75.0	
男子順位			5		1		2		6		8		4		7		3	

■女子

競技種目	大学名	三重大		名古屋大		岐阜大		名工大		豊技大		静岡大		浜医大		愛教大		備考
		順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
1	陸上競技	4	3.0	5	2.0	2	5.0					3	4.0	6	1.0	1	6.0	
2	水泳	6	1.0	3	4.0	2	5.0					5	2.0	4	3.0	1	6.0	
5	硬式テニス	2	5.0	4	3.0	1	6.0					3	4.0	5	1.5	5	1.5	5位以下は順位なし
6	ソフトテニス	1	5.0			3	3.0	5	1.0			2	4.0			4	2.0	
7	バスケットボール	4	1.0			2	3.0					1	4.0			3	2.0	
8	バレーボール			4	3.0	1	6.0					3	4.0	5	2.0	2	5.0	
9	卓球	2	5.0	5	2.0	1	6.0	4	3.0			3	4.0			6	1.0	
10	バドミントン	5	3.0	2	6.0	4	4.0	6	2.0			1	8.0	3	5.0	7	1.0	
12	ハンドボール																	オープン競技
13	柔道																	オープン競技(団体戦成立せず)
14	剣道	3	3.0	4	2.0	5	1.0					2	4.0			1	5.0	
15	空手道	5	2.0	1	6.0	6	1.0					2	5.0	4	3.0	3	4.0	
16	弓道			4	4.0	2	6.0	5	3.0			1	8.0	3	5.0	6	2.0	
17	体操																	オープン競技
19	アーチェリー	2	3.0			3	2.0									1	4.0	
合計得点			32.0		36.0		51.0		9.0		0.0		53.0		20.5		44.5	
女子順位			5		4		2		7		8		1		6		3	



サッカー



空手道



少林寺拳法

ソウル大学病院と協定を締結

●医学部附属病院

医学部附属病院は、7月23日(月)、韓国のソウル大学病院において、同院と看護師など病院職員を相互に派遣する協定「名古屋大学医学部附属病院とソウル大学病院との覚書」を締結しました。本学とソウル大学は、平成18年に大学間学術交流協定を締結し、相互に学生の受け入れを行っていましたが、交流対象を看護師などの病院スタッフにも広げるため、新たに病院同士の協定を結ぶことを決めたもので、看護部門が中心となって、現場レベルで国外の病院と協定を結ぶのは、国立大学病院では初となります。

看護師などのコメディカルが海外交流を行う機会は少ないのが一般的ですが、同院では、平成19年より毎年10名程度の事務職員及びコメディカルを対象に、各分野における業務改善に資するため、タイ、シンガポール、中国、韓国等における医療・経営の現場を視察する機会を設けてきました。看護部でも、グローバルな社会に対応できる国際色豊かな看護師の育成を目指し、国際交流を進めていくためのプロジェクトを平成22年に立ち上げ、英語の語学教室を開講、平成24年からは韓国語教室も追加し、対象も看護師にとどまらず、コメディカル全体へと広げました。



記念撮影



協定書に調印する両病院長

昨年10月、三浦医学部附属病院看護部長らによるソウル大学病院の視察において、本学大学院医学系研究科教授であった故武澤 純氏と交友があったイ・グクヒョン ソウル大学病院麻酔科教授の支援のもと、ソン・キョンジャ ソウル大学病院看護部長と会談し、看護部門の人事交流についての合意を得て、念願の人事交流の第一歩を踏み出しました。今年2月には副看護部長2名をICU領域に一週間派遣し、ソウル大学病院の教育プログラムを経験したのを皮切りに、イ教授とソン看護部長を医学部附属病院に招いて講演会を行うなど相互の交流を深めました。そして今年10月に、ソウル大学病院から看護師2名が派遣されることが決まり、協定の締結に向けた準備を急速に進めてきていました。

締結式には、松尾医学部附属病院長、三浦同院看護部長、若園同院副看護部長、西脇同院麻酔科診療科長、粕谷国際交流室長らが出席し、松尾病院長とチョン・ヒウォン ソウル大学病院長との間で協定書が交わされました。松尾病院長は協定締結後のあいさつで「チーム医療という観点からも、看護師レベルに交流を広げることにより、アジアで中核的な存在の両病院が世界をリードする新しいヘルスケアや医療システムを構築できることを期待する」と述べました。両病院の継続的な交流を通じて、現場の実際を体験することにより、互いに抱えている課題に対する取り組みや専門分野の発展のための研究などが進められることが期待されます。

両病院では、医師も両病院間でテレビ会議を行う準備を始めており、今後、放射線技師、検査技師、薬剤師、臨床工学技師、理学療法部門、さらに事務職員の相互派遣にも取り組み、病院スタッフの専門性を高めていく予定です。

テクノフロンティアセミナー2012を開催

●工学部

工学部は、7月27日(金)、同学部電気電子・情報工学科の各学生実験室等において、テクノフロンティアセミナー2012「触れてみよう、電子と情報の最先端に」を開催しました。

同セミナーは、電気電子・情報分野の最先端の研究を直接体験し工学の面白さを理解してもらうことにより、近年



集合写真

の若年層の理工系離れを少しでも解消することを目的に、毎年この時期に、高校生を対象に開催されています。今年度は、東海地方を中心に17の高等学校から38名の参加がありました。

参加者は、「電子ブロックで体験する物理と研究最前線」、「エコロジーな発電装置を作ろう!」など6つの実験課題の中から各自が選んだ課題について、同学科の教員や大学院学生のアドバイスのもと、試行錯誤を繰り返しながら、熱心に製作・実験に取り組みました。参加者は教員や大学院生との交流や大学施設の利用を通じ、大学生活を実感する充実した一日を過ごせたようでした。

テクノサイエンスセミナー、化学・生物実験講習会を同時開催

●工学部

工学部は、8月9日(木)、同学部化学・生物工学科の各実験室等において、テクノサイエンスセミナー、化学・生物実験講習会を同時開催しました。

同企画は、高校生を対象に、応用化学、分子化学工学及び生物機能工学の研究・学問の最先端に触れ、体験実験を通じて教員や大学院生と直接交流する中で、大学で化学を



薄膜を作製する様子

学ぶことの面白さを体験してもらうことを目的に、毎年この時期に開催しています。今年度は、応募者が定員を大幅に超えたため、抽選により選ばれた愛知県、岐阜県、三重県の36校からの高校生95名が参加しました。

参加者は「高分子のナノ構造で光を操ろう!」、「光るDNAをつくろう」、「金属イオンを分けてみよう、花火の色を見てみよう」、「機能性高分子を作って、触ってみよう」など化学や生物に関連した16の実験課題の中から、各自が選択したテーマについて、午前と午後各1回ずつ2つの実験に取り組みました。教員と大学院生の指導のもと、マイクロピペットや反応装置などを使って、自らの手を動かし、大学の研究設備を駆使して熱心に課題に取り組む姿が見られました。目の前で起こる変化をしっかりと観察し、その化学変化や現象に驚きを感じている様子でした。

実験後に行われた交流会にも多くの高校生が参加し、教員や大学院生と和やかに語り合っている様子も見られました。大学での実験を体験し、教員や大学院生と交流する中で、化学に対する興味がより深まったようでした。

「3大学工学系人材交流プログラム」第3回シンポジウムを開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科は、7月31日(火)、ES総合館において、「3大学工学系人材交流プログラム」第3回シンポジウム－戦略的人材交流を考える－を開催しました。

同プログラムは、大阪大、東京工業大、本学の3大学の工学系研究科に在籍する若手教員の人材交流を通じて、人材の育成及び参加大学間での知の共有化・組織の共進化を



パネルディスカッションの様子

実現することを目的に、准教授・講師を他の参加大学に3年間派遣するものです。プログラム開始から7年目を迎え、現在2名の教員が派遣されており、11名の教員が帰任しています。今回のシンポジウムは、同プログラムのさらなる発展を目指し、プログラムの内容紹介と意見交換を行うことを目的として開催され、板倉周一郎文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課長、丸山俊夫東京工業大学工学系長、掛下知行大阪大学工学研究科長、鈴置工学研究科長、同プログラムにより派遣された教員に加えて、3大学から多数の教職員が参加しました。

新美工学研究科副研究科長及び西澤典彦工学研究科教授の司会のもと、3大学の工学系研究科(系)長及び板倉課長によるあいさつ、3大学交流制度の説明があり、続いて派遣体験を持つ田川哲哉工学研究科准教授、高橋篤司東京工業大学准教授、安田清和大阪大学講師の3名が講演しました。その後、3大学の工学系研究科(系)長、板倉課長、派遣教員3名によるパネルディスカッション「3大学工学系人材交流プログラムのこれまでとこれから」が行われました。

第24回「形式ベキ級数及び代数的組合せ論」国際会議を開催

●大学院多元数理科学研究科

大学院多元数理科学研究科は、7月30日(月)から8月3日(金)までの間、理学南館坂田平田ホールにおいて、第24回「形式ベキ級数及び代数的組合せ論」国際会議(FPSAC'12)を開催しました。

FPSACは、組合せ論(離散的な対象を解析する数学の分野)と、数学の他分野や物理学、計算機科学などとの関連をテーマとして毎年開催されている国際会議で、第24回にあたる今回は本学で開催され、日本、アメリカ、フランス、カナダ、ドイツ、韓国、オーストリアなど20カ国から

約190名の研究者が参加しました。世界的に著名な研究者が参加する一方で、半数以上が大学院生を含む若手研究者でした。

会議では、ジル・カライヘブライ大学教授による「離散等同性：問題、結果、応用と手法」をはじめ、招待講演者による8つの基調講演が行われました。また、130件を超える質の高い投稿論文の中から受理された27件の一般講演、57件のポスター発表が行われ、組合せ論とその関連分野における最新の研究成果が披露されました。さらに、組合せ論に関連するソフトウェアの解説も行われました。

熱気あふれる講演と活気ある討論が繰り返され、休憩時間中やプログラム終了後も活発に議論する参加者の姿が数多く見られました。会議の最後には、最優秀論文賞が2名の大学院生に授与されました。



集合写真

平成24年度学術ポータル担当者研修を実施

●附属図書館

附属図書館は、8月1日(水)から3日(金)の3日間、国立情報学研究所との共催により、平成24年度学術ポータル担当者研修を実施しました。

9回目となる今年度の研修は、Web技術を活用した学術情報の提供・発信サービスの企画立案の能力開発をテーマに開催され、全国の大学図書館等29機関から30名の職員



最終プレゼンテーションの様子

が参加しました。

アカデミック・リソース・ガイド株式会社の岡本 真氏の進行により、講師8名による講義及びグループ討議が行われ、グループ討議では、受講者が、大規模論文データベース、オープンコースウェア、文献管理ツール、ソーシャルメディア、ディスカバリサービス、次世代総合目録の6つのテーマ別にグループに分かれ、図書館長に提出したWebサービスの企画書が却下されて再提案しなければならないという設定で検討を行いました。

最終プレゼンテーションでは、各グループがそれぞれの検討成果を発表し、他の受講者からコメントと評価を受けました。

緊張感のある大変有意義な実践的研修となりました。

ICCAE 2012年度第1回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、7月24日(火)、2012年度第1回オープンセミナーを開催しました。セミナーでは、ICCAEの外国人客員研究員であるジョン・キマニ ケニア国立農業研究所上席研究員が、気候変化・変動に脅かされている東アフリカにおける稲作の生産性向上に向けた国際共同研究について報告しました。



講演するキマニ上席研究員

ケニアを含む東アフリカでは、コメの消費が急速に拡大しています。コメは、東アフリカにおける食糧、栄養安全保障及び農家の収入源としてますます重要な作物になりつつあります。しかし、同地域におけるコメ生産は、気候変化・変動及び生産資源基盤の減少に脅かされています。このような現状を持続可能な方法で克服することを目指し、ドイツ連邦教育研究省(BMBF)の支援のもと、カールスルーエ技術研究所やブレーメン大学等のドイツの研究機関とケニア、タンザニア及びウガンダの農業研究機関による国際共同研究が計画されています。同セミナーでは、その研究計画立案に関するワークショップに参加したキマニ氏が、同国際共同研究の枠組み及び構想について報告しました。

気候変化・変動によって東アフリカのコメ生産がどのように変化するかをシミュレーションし、農家が気候変化・変動に適應した栽培管理を行うための支援システムを開発するとともに、将来予測される気象条件に適應したイネ品種を開発する計画が説明され、ケニアにおけるイネ育種システムの現状等について活発な討議が行われました。

第25回タンデム加速器及びその周辺技術の研究会を開催

●年代測定総合研究センター

年代測定総合研究センターは、7月20日(金)、21日(土)の2日間、野依記念学术交流館カンファレンスホールにおいて、第25回タンデム加速器及びその周辺技術の研究会を開催しました。

同センターは、国内のタンデム加速器実験施設の1つとして学術研究や教育に貢献し、貴重な研究成果を国内外に



タンデム加速器実験施設見学の様子

発信するとともに教育成果をあげています。今回は、国内のタンデム加速器実験施設の研究者が本学に集い、施設維持や研究推進に関わる問題点及び研究成果を発表し、情報交換を行いました。口頭発表が26件、ポスター発表が8件あり、また同センターのタンデム加速器による放射性炭素年代測定施設が公開され、多数の見学者がありました。

特別講演では、高嶋圭史シンクロtron光研究センター教授及び岡本 渉同センター技術専門職員が、「中部シンクロtron光利用施設の紹介と現状」と題し、中部地区の大学、産業界、行政の協力により推進されているシンクロtron光利用施設の設置・調整の現状を紹介しました。さらに増田公明太陽地球環境研究所准教授は、「炭素14と宇宙線変動」と題し、同センターの放射性炭素年代測定施設を利用した研究成果を紹介しました。今年6月に、過去における大気中の炭素14濃度の急激な変動に関する増田准教授らの研究成果が科学雑誌「Nature」に発表されており、国内外から注目されているところです。

研究者、学生及び一般の方など、計95名の参加があり、活発な質疑応答、意見交換が行われました。研究会の報告書は後日出版される予定です。

第81回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月20日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第81回防災アカデミーを開催しました。

同センター兼任教員である窪田由紀教育発達科学研究科教授が、「心理学で危機に備える」というタイトルで講演を行い、阪神・淡路大震災以降社会的にも注目されはじめ

た災害、事件・事故後の心理的ケアに関する話題をはじめとして、心理学の立場から災害予防に寄与する方法論について話しました。心理的ケアについては、心的外傷後ストレス障害(PTSD)に関する正しい知識の理解や、心理的危機からの回復にとって重要な留意点を述べ、どのように被災者をサポートすれば良いかを具体例をもとに説明しました。

また、「こころの減災能力育成」として窪田教授が取り組んでいる防災教育プログラムを紹介し、事例として、映像教材を用いて巨大地震発生時の諸現象を理解した後に10秒呼吸法を実践し、日々の生活と周囲の人々との関係の見直しが特に重要であることが確認されました。

来場者は90名にのぼり、会場からは、防災教育プログラムの具体的対象の目安や啓発に用いる素材の内容などをめぐって、活発な質疑応答が行われました。



質疑応答の様子

高大連携高校生防災教育推進事業「高校生防災セミナー」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月24日(火)、25日(水)、30日(月)、31日(火)の4日間、環境総合館レクチャーホール及びES総合館ESホールにおいて、高大連携高校生防災教育推進事業「高校生防災セミナー」を開催しました。

同セミナーは、大人になった時に巨大地震などによる大災害を経験するであろう高校生に、災害発生の科学や減災



NPOによる災害図上訓練の様子

対策、災害と付き合う知恵、そして、逞しく「生きる力」を学び取ってもらい、自立して活動できる防災リーダーになってもらうことを目的として開催しており、夏休み中の4日間の座学・実学による学修と2学期の実践活動、年末の活動成果発表会から構成されています。今年度は県内の高等学校15校から、高校生・教員合わせて75名が参加しました。

夏休み中の4日間のセミナーでは、減災連携研究センター関連教員による地震や津波災害の発生メカニズムやその対策、災害を大きくする地理的要因、災害時の心理に関する講義、愛知県による防災行政に関する講義、また、NPOによる災害図上訓練、防災ボランティアの役割に関する講義や、各学校での防災活動のアクションプラン作成のワークショップなどが行われました。

31日(火)の午後には、昨年度より参加しているⅡ期生の成果報告と今年度から参加したⅢ期生の計画発表が行われました。ESホールはほぼ満席で、地元自治体の防災担当者も加わり、同センター教員や防災担当者との質疑応答が活発に行われました。12月27日(木)には、高校生防災フォーラムを開催し、代表校による活動発表やグループ発表、意見交換などが行われる予定です。

防災講演会あいちを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月29日(日)、豊田講堂において、気象庁、名古屋地方気象台、愛知県、名古屋市との共催で、防災講演会あいち「津波から生き残るために!」を開催しました。同講演会は、東日本大震災を教訓として津波災害から命を守ることを目的に開催したもので、500名の参加がありました。



講演会の様子

小林壯行愛知県防災局長、福和減災連携研究センター長のあいさつの後、第1部では、水谷法美同センター教授が、伝搬速度・屈折現象といった津波のメカニズム・性質を正しく理解して有効な対策を講じていくことの重要性について説明し、永井 章気象庁地震津波監視課長からは、東日本大震災時の津波警報発令の時系列について、第一報目があまりに小さかったため避難に結びつかなかったことを課題とし、短時間で地震規模をより正確に把握する手段を整備するとともに、警報の表現も避難を促すような特別な表現を入れることで改善していくとの話がありました。

続いて第2部では、福和センター長をコーディネータとして、三輪弘光名古屋市防災危機管理監、清水幹夫NHK名古屋放送局報道部長、栗田暢之NPO法人レスキューストックヤード代表理事、近藤ひろ子同センター防災教育アドバイザーの4名によるパネルディスカッションが行われました。次世代の防災人材をいかに育てるか、また南海トラフ地震が発生した際に助かるにはどうすれば良いかといった点について意見発表や議論を行い、命を守る行動について考えました。

「育もう！子どもたちの元気な笑顔を！」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、8月11日(土)、豊田講堂において、東日本大震災復興応援企画実行委員会との共催で、東日本大震災復興応援企画「育もう！子どもたちの元気な笑顔を」を開催しました。

約1,000名の方が来場した同企画では、初めに、本学の学生サークルによって、復興への願いを込めた威勢のい



ミュージカル上演の様子

い「はねこ踊り」が披露されました。はねこ踊りは、宮城県を代表する民俗芸能として、無形民俗文化財に指定されている踊りです。その後、栗田暢之 NPO 法人レスキューストックヤード代表理事と、福和減災連携研究センター長が、東日本大震災から1年5カ月経た今でも元通りの生活を送れない方々を、今後も愛知からしっかり支援していきたいと話しました。

次に、愛知県へ県外避難している子どもたちの作文の朗読がありました。小中学生の女の子5人から、生きる意味を自分自身で問うたこと、放射能の風評でいじめられないか悩んだこと、そしてやっぱり家族は一緒に一番幸せだということなどが朗読され、参加者の胸を打ちました。

メインイベントは宮城県七ヶ浜町のミュージカル団体「NaNa5931」によるミュージカルでした。東日本大震災の実話をもとにしたもので、残された人々が強く生きることと復興支援への感謝をテーマに熱演されました。

最後に、愛知県内の子どもたちによる合唱があり、フィナーレは出演者・来場者全員で「今日の日はさようなら」を歌いました。

グローバル COE 第5回国内シンポジウムを開催

●グローバル COE プログラム「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」

グローバル COE プログラム「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」は、7月19日(木)、中央診療棟3階講堂において、第5回国内シンポジウム「精神・神経疾患研究の未来を切り拓く新機軸」を開催しました。

シンポジウムでは、学内外の8名の講演者から、日本人統合失調症患者の全ゲノム解析による病因遺伝子の解明・

治療法開発、特定の遺伝子異常により発症する自閉症治療のためのオキシトシン補充療法、アルツハイマー病やパーキンソン病などの神経変性疾患及び大脳皮質形成異常の分子病態解明とそれに基づく動物モデルを利用した治療法開発、さらにそれらの臨床応用など、様々な角度から最近の研究の進歩が紹介され、将来への展望が広く議論されました。さらに、岸本忠三大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授による特別講演では、インターロイキン6の自己免疫疾患の発症への関わり及び発症機構に基づく治療法の開発について紹介されました。

医学部だけでなく、生理学研究所、基礎生物学研究所、愛知県がんセンター、国立長寿医療研究センターなど、近隣の関係する研究機関からも若手研究者をはじめとする多くの参加があり、総数は203名にのぼりました。大学院生などからも研究の詳細な内容について活発な質疑があり、大変盛況でした。



シンポジウムの様子

ミクロの探検隊を開催

●博物館

博物館は、8月4日(土)、ミクロの探検隊「雑木林のムシを電子顕微鏡で観察しよう」を開催しました。

参加者は、抽選で選ばれた小学5、6年生と中学生を中心とする20名で、初めに、大学構内の雑木林でムシの採集を行いました。今回は、竹で四隅を固定した白い布（ビーティングネット）を広げて棒で草や枝をはたき、落ちてき



ビーティングネットでムシを採集する様子

た小さなムシを捕まえる方法で採集しました。ほとんどの参加者には初めての採集方法だったようですが、すぐに慣れ、上手に小さなムシを捕まえました。

その後博物館の実験室に戻り、名古屋昆虫同好会の井上品次氏の指導のもと、ムシの同定を行いました。ゲンバムシ、ナガニジイロゴミシダマシ、コエビガラスズメ、キマワリ、ホタルガの幼虫などの昆虫類に加え、クモ類やダニ類など、色々な種類のムシを採集することがわかりました。続いて実体顕微鏡を使用してムシを観察、スケッチし、電子顕微鏡で観察するための試料作りを行いました。午後は、走査電子顕微鏡を使って観察を行い、その後、一人ひとりが撮影したムシについて発表し、記念として、撮影した電子顕微鏡写真で作ったポストカードを持ち帰りました。

また、ミクロの探検隊を行った4日後の8日(水)には、今年度の同館の入館者が1万人に達しました。1万人目は工学部を志望している女子高校生で、同日開催されていたオープンキャンパスの参加者でした。博物館は今後も、子どもからシルバー世代まで誰でも気楽に入館して楽しめる開かれた大学の窓口として、さらなる内容の充実に取り組めます。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
1 現代日本読百科 (648)：自然の残る「島の中心部」町田 健文学研究科教授	7.16 (月)	中日 (朝刊)
2 「認知症セミナー～みんなで学ぼう認知症！予防から介護まで」開催：7月15日 松尾清一医学部附属病院院長が開会のあいさつ、葛谷雅文医学系研究科教授が特別講演、梅垣宏行医学部附属病院助教などによるパネルディスカッションが行われる	7.16 (月) 8. 9 (木)	読売 読売
3 本学など3研究室と NTT ドコモは産学協同プロジェクト「ネクストコミュニケーションフォーラム2012」で学生を対象としたスマートフォン用ウェブサイトやアプリケーションなどのコンテストを開催	7.16 (月) 7.21 (土)	日刊工業 中日 (朝刊)
4 現代日本読百科 (649)：馬車の「轍の音」町田 健文学研究科教授	7.17 (火)	中日 (朝刊)
5 本学は秋入学に対する調査で「実現性は困難であり、メリットは明らかでない」と回答	7.17 (火)	朝日 (朝刊)
6 現代日本読百科 (650)：この「部署に配属」になる 町田 健文学研究科教授	7.18 (水)	中日 (朝刊)
7 教えて！ドクター：糖尿病治療のインスリン注射についてソレイユ千種クリニック院長木村那智氏本学卒業生が解説	7.18 (水)	朝日 (朝刊)
8 現代日本読百科 (651)：首相が「立ち腐れる」町田 健文学研究科教授	7.19 (木)	中日 (朝刊)
9 水野哲也環境医学研究所准教授の研究「PTSDにおける慢性神経炎症の関与とその制御方法の検討」が第45回医学研究助成対象になる	7.19 (木)	毎日 (朝刊)
10 本学のオープンキャンパスの日程が紹介	7.19 (木)	読売
11 夢ナビライブ2012開催：19日 本学が出演	7.20 (金)	中日 (朝刊)
12 暮らしの法律相談コーナー：愛知市民法律事務所小田直子氏本学法科大学院卒業生が解説	7.20 (金)	朝日 (朝刊)
13 医学部附属病院は韓国ソウル大学病院と病院職員を相互に派遣する協定を締結	7.21 (土)	日経 (朝刊)
14 きらり中部：廣井 悠減災連携研究センター准教授の帰宅困難者の研究が紹介される	7.21 (土)	日経 (夕刊)
15 名古屋第一赤十字病院血管外科部長錦見尚道氏本学卒業生が血管外科について解説	7.21 (土)	中日ローズ
16 第2回地球教室「ナゴヤで化石をさがそう！」開催：8月25日、26日	7.21 (土) 7.27 (金)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
17 森嶋昭夫本学名誉教授は原子力発電の安全対策を握る経済産業省について「外部の声が届かぬ聖域」と語る	7.22 (日)	中日 (朝刊)
18 元環境学研究科特任准教授杉山範子氏がドイツのエネルギー自給自足の村を紹介	7.22 (日)	中日 (朝刊)
19 法科大学院が社会人のための大学院として紹介される	7.22 (日)	日経 (朝刊)
20 未来を拓く大学1：濱口総長が本学の特性や取組みについて語る	7.23 (月)	読売
21 現代日本読百科 (652)：「急に腹痛に襲われる」町田 健文学研究科教授	7.23 (月)	中日 (朝刊)
22 田所敬一環境学研究科准教授らのグループは駿河湾に津波を巨大化させる可能性のあるひずみが蓄積されている場所があることを突き止めた	7.23 (月)	中日 (朝刊)
23 くらしナビ：小田裕昭生命農学研究科准教授が肝臓時計とメタボリックシンドロームの関係について解説	7.23 (月)	毎日 (朝刊)
24 現代日本読百科 (653)：「刃物で刺された失血死」町田 健文学研究科教授	7.24 (火)	中日 (朝刊)
25 現代日本読百科 (654)：「営業中止を判断」町田 健文学研究科教授	7.25 (水)	中日 (朝刊)
26 室原豊明医学系研究科教授は皮下脂肪から取り出した幹細胞でリンパ管を再生することに成功	7.25 (水)	中日 (朝刊)
27 リクルートによる「志願したい大学」ランキングで本学は東海地区1位	7.25 (水)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
28 本学などが発起人となる新ヘルスケア産業フォーラムが発足	7.25 (水)	日刊工業
29 東海学生マンドリン連盟第46回合同演奏会開催：8月10日 本学ギターマンドリンクラブなどが演奏	7.25 (水)	中日 (朝刊)
30 教えて！ドクター：京命クリニック院長三ツ口由紀子氏本学元医学部附属病院医員が肩こりについて解説	7.25 (水)	中日 (朝刊)
31 東日本大震災復興応援企画「育もう！子どもたちの元気な笑顔を！」豊田講堂にて開催：11日	7.25 (水) 8.12 (日)	中日 (朝刊) 読売
32 現代日本読百科 (655)：薬物を「所持したとして逮捕」町田 健文学研究科教授	7.26 (木)	中日 (朝刊)
33 熊谷朝臣地球水循環研究センター准教授はエルニーニョ現象の影響でボルネオ島の熱帯雨林が壊滅的な打撃を受ける恐れがあることを突き止めた	7.26 (木)	中日 (朝刊)
34 羽田野真帆さん国際開発研究科大学院生は名古屋難民支援室の初代コーディネーターに就任	7.26 (木)	毎日 (夕刊)
35 公益財団法人科学技術交流財団はシンクロトン光センターでファーストライトを検出したと発表	7.27 (金)	中日 (朝刊)
36 法政国際教育協力研究センターはベトナムなど4カ国の学生を招いて懇親会を開催	7.27 (金)	読売
37 赤崎 勇本学特別教授の発明した青色 LED について豊田合成株式会社と日亜化学工業株式会社の研究者が同時に日本結晶成長学会第19回技術賞を受賞	7.27 (金) 8. 2 (木)	中日 (朝刊) 日刊工業
38 シンポジウム「医療安全管理体制のあり方を考えるー愛知県弁護士会の調査を踏まえてー」開催：28日 長尾能雅医学部附属病院教授がパネリストとして参加	7.28 (土)	朝日 (朝刊)
39 上田 実医学系研究科教授は日本再生医療学会の講演を企画し「日本は再生医療の基礎研究では先進国だが、産業化では後進国になってしまう」と話す	7.29 (日)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
40 中東正文法学研究科教授のゼミが2012年6月日経 TEST 学生団体対抗戦ゼミ部門で1位となる	7.29 (日)	日経 (朝刊)
41 株式会社TBS テレビと大日本印刷株式会社が始める「キャンパスTV」に新たに本学なども加入	7.29 (日)	日経 (朝刊)
42 現代日本誤百科 (656):「動きを物まねする」町田 健文学研究科教授	7.30 (月)	中日 (朝刊)
43 未来を拓く大学2:愛知教育大学長松田正久氏本学卒業生	7.30 (月)	読売
44 質のよい睡眠を得るために:株式会社ウィーヴァ ジャパン代表取締役社長高岡本州氏本学卒業生	7.30 (月)	朝日 (朝刊)
45 研究現場発:吉村 崇生命農学研究科教授が研究する季節繁殖について解説	7.31 (火)	中部経済 (朝刊)
46 本学や東京農工大学は強風でも倒れにくいイネを開発	7.31 (火)	日経 (朝刊)
47 中野敏行理学研究科助教の研究「超高速原子核乾板自動飛跡読取装置の開発とその応用」が2012堀場雅夫賞を受賞	7.31 (火)	日刊工業
48 名大カフェ“Science, and Me”第25回「ホヤって何?—ホヤの受精研究に魅せられて—」開催:8月8日 澤田 均 理学研究科教授が話す	7.31 (火)	中日 (朝刊)
49 現代日本誤百科 (657):「リスクを過大評価」町田 健文学研究科教授	8. 1 (水)	中日 (朝刊)
50 本学などの国際実験チームはヒッグス粒子の最新のデータ結果をまとめる	8. 1 (水)	中日 (朝刊)
51 博物館特別展関連講演会「トルゴート・モンゴルの家族・親族」開催:3日 田中華子博物館研究員が講演	8. 1 (水)	中日 (朝刊)
52 本学と財団法人科学技術交流財団が大型実験施設「シンクロトン光利用施設」の中核部の稼動に成功	8. 2 (木)	日経 (朝刊)
53 平林 博元フランス大使が駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生に早期退任を提言	8. 2 (木)	毎日 (朝刊)
54 本学で名古屋スペースキャンプ2012 NSC-1開催:2日 小型ロケットの打ち上げを行う	8. 3 (金)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
55 本学環境サークル「Song of Earth」が育てた2000本のヒマワリが週末に見頃を迎える	8. 3 (金)	中日 (朝刊)
56 豊國伸哉医学系研究科教授などがアスベストによる悪性中皮腫の発症原因を解明	8. 4 (土)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
57 創造性の育成塾開催:4日 野依良治本学特別教授が科学五輪を目指す中学生に講義	8. 4 (土)	中日 (夕刊)
58 本学と富士通株式会社は振り込め詐欺を通話から判断するソフトの実証実験を開始	8. 4 (土)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
59 防災講演会あいち「津波から生き残るために!」開催:7月29日 福和伸夫減災連携研究センター教授は「備えに自己責任を負わなければならない」と話す	8. 5 (日)	中日 (朝刊)
60 現代日本誤百科 (659):「今日は気候がいい」町田 健文学研究科教授	8. 6 (月)	中日 (朝刊)
61 法学研究科附属法情報研究センターが地方自治体の条例作成を支援するシステムを開発し10月にインターネットで公開	8. 7 (火)	日経 (朝刊)
62 本学と京都大学などによる研究グループは青ジソから抗酸化効果が得られることを確認	8. 7 (火)	中日 (朝刊) 日刊工業
63 現代日本誤百科 (660):ここで「みそを入れてあげます」町田 健文学研究科教授	8. 7 (火)	中日 (朝刊)
64 全国訪問教育研究会第25回全国大会開催:7~9日 三浦清邦医学系研究科寄附講座教授が講演	8. 8 (水)	朝日 (朝刊)
65 現代日本誤百科 (661):「体験者優遇」する 町田 健文学研究科教授	8. 8 (水)	中日 (朝刊)
66 伊丹健一郎理学研究科教授などはクロスカップリング反応を従来よりも容易に行う方法を開発	8. 9 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
67 書籍:「いまだから伝えたい戦時下のこと—大学教員の戦争体験記—」益川敏英本学特別教授と諏訪兼位同名誉教授ほか著	8. 9 (木)	中日 (朝刊)
68 大平英樹環境学研究科教授が「五輪の日本人選手の活躍に感動するのは脳が選手と自分を同一視するからだ」と解説	8. 9 (木)	朝日 (夕刊)
69 講演会「3.11で問われた個人と国家のありかた—原発問題における学問の自由と知る権利—」開催:25日 愛敬浩二 法学研究科教授が講演	8.10 (金)	中日 (朝刊)
70 医学部附属病院は患者86人分の個人情報記録したUSBメモリーを紛失	8.11 (土)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) 読売
71 本学など県内4大学の茶道部が名古屋テレビ塔で清涼茶会を開催	8.11 (土)	朝日 (朝刊)
72 現代日本誤百科 (663):雨が「降り始めてきた」町田 健文学研究科教授	8.13 (月)	中日 (朝刊)
73 現代日本誤百科 (664):「昔の現状」を回復する 町田 健文学研究科教授	8.14 (火)	中日 (朝刊)
74 「LHC 実験にて 新粒子(ヒッグス粒子?)発見」開催:19日 戸本 誠理学研究科准教授が講演	8.14 (火)	中日 (朝刊)
75 現代日本誤百科 (665):運転では「経験値が上」町田 健文学研究科教授	8.15 (水)	中日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

8月16日(木)～10月11日(木)
(期間内の火・木曜日)

場 所：経済学部 1階第2講義室
時 間：18:00～19:30
対 象：一般
参 加 費：9,200円(全15回)

平成24年度名古屋大学公開講座

テ ー マ：「危機に立ち向かう英知—解決への展望—」



[問い合わせ先]
研究協力部社会連携課 052-789-5969

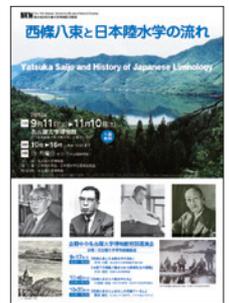
9月11日(火)～11月10日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

第24回博物館企画展「西條八束と日本陸水学の流れ」

[関連講演会]

場 所：博物館講義室
参 加 費：無料
10月6日(土)
時 間：14:00～15:30
講演題目：「西條八束さんの陸水学と私」
講 演 者：川那部浩哉氏(京都大学名誉教授)
10月20日(土)
時 間：14:00～15:30
講演題目：「西條八束さんとお父上の西條八十さん」
講 演 者：諏訪兼位氏(本学名誉教授)



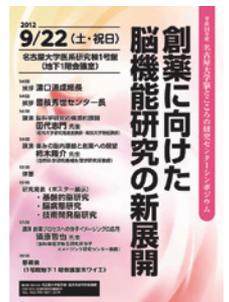
[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

9月22日(土)

場 所：医学部医系研究棟 1号館
地下1階大会議室
時 間：14:00～18:00
参 加 費：無料

脳とこころの研究センター
シンポジウム

講演題目：「脳科学研究の倫理的課題」
講 演 者：田代志門氏(昭和大学講師)
講演題目：「痛みの脳内基盤と創薬への展望」
講 演 者：柿木隆介氏(自然科学研究機構生理学研究所教授)
講演題目：「創薬プロセスへの分子イメージングの応用」
講 演 者：須原哲也氏(独立行政法人放射線医学総合研究所グループリーダー)



[問い合わせ先]
医学部・医学系研究科総務課 052-744-1901

9月29日(土)

場 所：生命農学研究科附属フィールド
科学教育研究センター
東郷フィールド
時 間：10:00～15:00
定 員：20名
対 象：中学生以上、一般
参 加 費：無料

地域貢献事業「都市近郊の農業教育公園」
「農業ふれあい教室」

テ ー マ：「『DNAを見る』—身近なものからDNAを取り出してみる—」

[問い合わせ先]
生命農学研究科
附属フィールド科学教育研究センター
東郷フィールド事務室 0561-37-0200

9月29日(土)

場 所：自然科学研究機構
岡崎コンファレンスセンター
(岡崎市明大寺町)
参 加 費：無料

第3回医学系研究科・生理学研究所
合同シンポジウム

講演題目：「神経回路再編：その糖鎖による制御」
講 演 者：門松健治(医学系研究科教授)
講演題目：「新規血栓性素因・アンチトロンビン抵抗性の発見」
講 演 者：小嶋哲人(医学系研究科教授)
講演題目：「色と質感を知覚する脳の働き」
講 演 者：小松英彦氏(生理学研究所教授)
講演題目：「TRPA1チャネルの制御機構と機能進化」
講 演 者：富永真琴氏(生理学研究所教授)

[問い合わせ先]
医学部・医学系研究科
経営企画課 052-744-2429

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月1日(月)

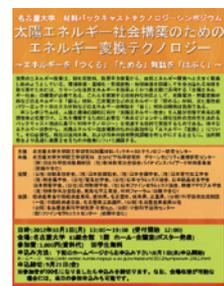
場 所：ES 総合館 1階 ES ホール、
ES 会議室
時 間：13:00~19:00
参 加 費：1,000円 (資料代、学生無料)

[問い合わせ先]

工学研究科
附属材料バックキャストテクノロジー
研究センター 052-789-3589

材料バックキャストテクノロジー シンポジウム

テ ー マ：「太陽エネルギー社会構築のためのエネルギー変換テクノロジー
—エネルギーを『つくる』『ためる』無駄を『はぶく』—」



10月2日(火)

場 所：理学南館 1階理学セミナー室
時 間：15:00~17:00
定 員：50名
対 象：本学大学院生、研究員、他
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

高等教育研究センター
助教 齋藤芳子 052-789-5696

院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー2012

B: Trust in numbers –客観性の起源–

内 容：現代社会において数値にした途端に一人歩きしてしまう多くの
ものを、史実に基づいて徹底的に探求した書物をもとにして
考 える

講 演 者：藤垣裕子氏 (東京大学教授)



10月4日(木)

場 所：ノースカロライナ・
バイオテクノロジー・センター
時 間：8:00~13:30
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

産学官連携推進本部国際連携部
特任教授 阿部正廣 052-788-6147

Biomarker / Molecular Therapeutics Roundtable

内 容：今年で3回目となる国際産学連携拠点 (NU Tech) が米国ノースカロライナ
州で開催する本学の優れたシーズ技術の発表会。地元の大学と共催

講演内容：バイオマーカーや分子標的治療に関する技術

講 演 者：高橋 隆 (医学系研究科教授)、
榎本 篤 (同准教授)、他

10月9日(火)~26日(金)

場 所：博物館野外観察園展示室
時 間：10:00~16:00
休 館 日：土・日曜日
(10月20日(土)は特別開室)
入 場 料：無料

[問い合わせ先]

産学官連携推進本部
あいちサイエンスフェスティバル
事務局 052-747-6527

サイエンスイラストレーション・ サマースクール2012 in あいち 受講者作品展



10月9日(火)、10日(水)

場 所：ES 総合館 1階 ES ホール
時 間：13:00~17:45 (10/9)、
10:00~18:00 (10/10)
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

情報科学研究科
附属組込みシステム研究センター
シンポジウム事務局 052-789-5186

第3回 NCES シンポジウム/ 第6回次世代自動車公開シンポジウム

内 容：招待講演、セッション、ポスター展示

10月9日(火)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール
時 間：18:00~19:30

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

第83回防災アカデミー

講 演 者：田中茂信 (減災連携研究センター客員教員)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月10日(水)、11月16日(金)

場 所：カフェフロンテ

時 間：18:00～19:30

参 加 費：無料

(会場にてドリンク等の注文が必要)

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

げんさいカフェーGen Science Café

【第17回】(10/10)

講演題目：「鉄筋コンクリート建造物の耐震性」

講 演 者：勅使川原正臣(環境学研究科教授)

【第18回】(11/16)

講演題目：「減災まちづくりをすすめていくために(仮題)」

講 演 者：村山顕人(環境学研究科准教授)

10月11日(木)

場 所：覚王山日泰寺

時 間：13:30～14:30

[問い合わせ先]

医学部・医学系研究科学務課

052-744-1981

医学部解剖弔慰祭

**10月13日(土)、27日(土)、11月10日(土)、
12月1日(土)、15日(土)、1月19日(土)、
2月2日(土)**

場 所：インキュベーション施設1階
プレゼンテーションルーム

時 間：10:00～15:00

対 象：大学院生、ポスドク

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

ビジネス人材育成センター

平成24年度後期 B 人セミナー

テ ー マ：「長期インターンシップ事前研修—知的財産の取扱いに関する留意点、
「キャリアシード」(10/13)

「企業における研究開発例と企業が求める人材、

「博士・ポスドクのための就職ガイダンス」(10/27)

「博士の就活スタート・リスタート、

「10年後の医薬品・医療機器産業をデザインする」(11/10)

「ビジネス人の基本スキル」、「サイエンスコミュニケーションとは、

サイエンスコミュニケーションの手法」(12/1)

「グローバルスタンダードで使われる伝達スキル、

「ビジネスマナーの基本とその応用」(12/15)

「Communications Styles」、「弁理士の業界と業務」(1/19)

「博士に必要なスキル」、「プレゼンテーションスキル研修」(2/2)

【訂正とお詫び】

名大トピックス231号(2012年8月発行)で以下の誤りがありましたので、深くお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

231号7ページ「第66回名古屋大学・大阪大学対抗競技大会」

対戦結果表の対戦結果列において、「名大」と「阪大」がいれかわっておりました。

正しくは、「名大」が右列の男子成績10勝、女子成績2勝、総合成績12勝、「阪大」が左列の男子成績17勝、女子成績10勝、総合成績27勝です。

231号16ページ・上・本文3行目「ミクロの探検隊を開催」

【誤】平成21年より

【正】平成19年より

名大トピックス No.232 平成24年9月18日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>)でもご覧いただけます。

表紙

法学部水島ゼミにおける
国際法模擬裁判の様子
(平成24年7月12日)



125 第13代総長 はまぐちみちなり 濱口道成 — 名大をひきいた人びと⑱ —

現在の濱口道成総長は、1951(昭和26)年、三重県伊勢市に生まれました。75年に名大医学部を卒業後、同大学院に進学し、80年には医学博士の学位を取得しました。同年、名大医学部附属癌研究施設助手、その4年後には名大医学部附属病態制御研究施設助教授となります。その後、ロックフェラー大学分子腫瘍学講座研究員として、アメリカでの3年間の研究生生活をへて、93(平成5)年には病態制御研究施設教授に昇任しました。同施設長、大学院医学系研究科副研究科長を歴任したのち、2005年から09年まで同研究科長を務めました。常に癌研究の最先端に身を置き、とくに癌の遺伝子治療の研究において大きな業績を上げてきました。

そして、2009(平成21)年4月1日に総長に就任しました。前任の平野眞一総長に続く名大生え抜きであると同時に、名大初の戦後生まれの総長です。

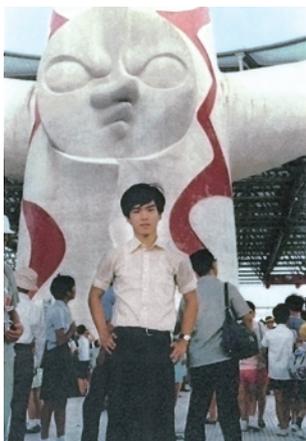
濱口総長は就任後、大学運営の指針として「濱口プラ

ン」を公表しました。ここで、「名古屋大学から Nagoya University へ」を表看板とし、世界の趨勢に対応する名大のグローバル化を大きな目標として掲げたのです。

その軸になっているのが、グローバル30の拠点大学として、受け入れ留学生を10年間に倍増させ、3千人にする計画です。その一環として、昨年度から全ての講義を英語でおこなうコースをスタートさせました。

濱口総長は、誠実・堅実だがややもすると内向きであると言われがちな名大生を、世界で活躍できる幅広い視野を持つ人材に育成する事業も重視しています。英語教育の強化、海外での語学研修、討論会やスピーチコンテスト、海外事務所の増設、YLC(若手育成プログラム)など、厳しい財政状況のなか、さまざまな施策をおこなっています。

また、今年(2019)の4月には、名大念願の大学院創薬科学研究科の設置を実現しました。



1	4	5
2	3	

- 1 第13代総長濱口道成(1951-)。現在、国立大学協会副会長も務めている。
- 2 大阪万博の会場にて、岡本太郎の「太陽の塔」の前で写真におさまる名大生時代の濱口総長(1970年)。
- 3 名古屋大学ヨーロッパセンターの開所式に出席した濱口総長(2010年5月、ドイツ・フライブルク市)。向かって右端は渡辺芳人理事・副総長(当時は副総長)。
- 4 モンゴル科学技術大学等との包括的連携・協力協定に調印した濱口総長(2011年6月、駐モンゴル日本国大使公邸)。
- 5 2011年12月に豊田講堂で開催された中国語スピーチコンテスト「江蘇杯」の受賞者たちと濱口総長。